

## 欠席委員からの意見

- ・新たに先進的な事業を実施することに加えて、その取り組みをどうやってしっかり発信するかがしあわせの村の全体的な課題。
- ・(入所型施設など生活の場を内包しつつも、) 利用する場、すなわち「非日常」的な施設という側面が強かった「しあわせの村」から、“しごと”を含め「日常」的な施設・日常の場という側面をより強化した施設へリニューアルしていく、そのために整っているハードウェアを活用してどんな仕掛けを作るか、という観点で各事業を見るべきではないか。
  
- ・新たな取り組みの各項目について
  - ③「認知症予防・共生」：特に、「どう発信していくか」が課題となる取り組み
  - ④「あらゆる子どもの成長支援」：しあわせの村内保育所の豊かな環境を活かした運営が印象的。これまで有料老人ホームと保育所を一体整備した際の経験からも、高齢者や障害者を対象とした事業と、子ども向けの事業と組み合わせることで大きな相乗効果が見込める(「認知症予防・共生」というコンテキストにおいても極めて有効)。さらに保育所の児童だけでなく、週末に訪れた子どもまで巻き込むことが出来れば、人手はかかるが、新たな取り組みとして大きな価値。
  - ⑥「動物とのふれあい」：核家族化や地域コミュニティの希薄化が進むなかで、しあわせの村は世代や障害の有無を超えた「ふれあいの場」となるべき。動物とのふれあいについても定期的の実施することが出来れば、動物を媒介とした「ふれあいの場」創出の先進的な取り組みとして価値があるのではないか。
  
- ・“しごと”創出拠点と地域との連携について
  - 「非日常」的な取り組みだけでは、地域も取り込んだ“しごと”創出拠点というシステムは成立しない。
  - 地域に向かって「日常」として提供できるものが無ければ持続的な運営は不可能。
  - 健康福祉関連ということであれば、高齢者に対しては日常的に関わる材料が多く考えられるが、現役世代をどうやって巻き込むかが課題。肩ひじを張ったボランティア活動だけでなく、簡単に誰でも出来るようなちょっとしたことに対する感謝の気持ちに対する評価(企業でよくやっている「サンキューポイント」のような取り組み)も仕掛けの中に取り込むことが重要。